

## アンチエイジング リサーチセンター開設

—国内初の「抗加齢医学」研究機関—



大学アンチエイジングリサーチセンター  
チエミ・プロフェッサー教授  
米井 嘉一

### 抗加齢医学の「伝道師」として

アンチエイジングリサーチセンターは、抗加齢医学を扱う日本で初めての研究機関として4月に開設されました。抗加齢医学とは、老化のプロセスそのものを一つの「病気」と捉えて、その原因を克服することで老化を「治療」し、健康で長生きすることを旨とする予防医学の一分野です。

私はもともと消化器を専門とする内科医でしたが、「物忘れがひどくなった」「疲れやすい」などの軽微な症状に対して「年ですな」の一言で、自然現象として片づけることに強い抵抗感を感じ、調べていく中でアメリカの抗加齢医学と出会いました。その後日本人として初めて米国の抗加齢医学会認定医となり、急激に高齢化社会へ進みつつある日本で、この医療分野を健全に普及させなければならぬとの思いを強くし、以後、抗加齢医学の「伝道師」を自認しています。こうして大学にその一大拠点ができたことは、今後ますます注目を集めるであろう抗加齢医学にとって非常に意義のあることだと思っています。

として幅広い層に読んでもらえるものにしたいたいと考えています。

### 「アンチエイジングドック」支援システムがスタート

大きなプロジェクトとして進めているのが、アンチエイジングドック（老化判定ドック）の支援活動です。健康で長生きする人は老化のスピードが遅いのではなく、全身がバランス良く老化し、いわゆる弱点が少ないということがわかっています。アンチエイジングドックとは、血液検査、血管年齢の測定、骨年齢の測定、高次脳機能検査などによって、老化のバランス、弱点を見極め、必要に応じて生活療法やサプリメント指導、薬物療法などを行うことで、バランスの良い老化を促し、生活の質（Quality of Life）を高めるものです。現在のところ限られた病院や診療所で行っていませんが、これをさらに広めるための支援システムをこの秋にも立ち上げる予定です。

これには産官学の協同体制が不可欠です。骨密度測定機器はオリックスにご協力をいただき、血液検査のためのバイオマーカーを新たに発見するため、本学、府立医科大学、慶應義塾大学で共同研究を進めています。検査を一方所で大量に行い、単価を下げるためには血液を運ぶ流通業界の協力も必要です。そしてシステム全体をコントロールするコンピュータソフトも開発中です。様々な業界がこのシステムに関わることになるでしょう。

老化の治療は、基本的には生活療法、つまり運動、食事、精神指導ですが、最も大切なのは精神指導です。目的を持って生活すること、「〇〇をするため、自分は絶対に寝たきりになら

抗加齢医学の拠点として当センターに課されている仕事は、まずは学会活動に関するものです。私が事務局長を務める「日本抗加齢医学会」は、2001年の設立当初20人だった会員数が、現在2000人を超えています。医療の世界では、臓器単位の専門化による弊害が叫ばれていますが、ここでは垣根を越えて幅広い専門分野の臨床医、研究者が参加しており、幅広い分野を網羅する先進的内容の演題が、毎回非常に大きな反響を呼んでいます。この学会の運営、そして学会活動を通じた抗加齢医学の普及活動を、センターで担っていくこととなります。

抗加齢医学を健全に普及させるための教育・啓発活動も行っています。今年6月に初めての「抗加齢医学専門医・指導士」認定試験を実施し、専門医制度がスタートしましたので、当センターとしても医師や医療従事者への教育に様々な形で関わると同時に、市民向けの公開講座なども行う予定です。

学術誌の発行にも関与します。学会では専門家向けに内外の論文を集めたWebジャーナル『Anti-Ageing Medicine』を、アンチエイジングに関心のある全ての人を対象に、雑誌『アンチ・エイジング医学』を発行しています。私も編集委員の一人

「ない」という強い意志がまず必要です。そして次の段階が、サプリメントによる治療です。サプリメントに関しては、情報が氾濫し、何をどう使えばよいか、医師、薬剤師、栄養士、誰に聞いてもきちんとした答えが返ってこないのが現状です。そこで、センターではサプリメントの臨床評価を行い、あるサプリメントが、どういうものに、どの程度良いか、どのような副作用があるかをきちんとデータで評価し、論文として発表していく予定です。ユーザーが商品を選別するのにも役立つと同時に、専門家にとっても指針となるようなものにならなければならないと思っています。

### 抗加齢医学の一大拠点へ

今後は、他大学や企業などとの共同研究にも力を入れていく予定です。現在、セルガレッジというベンチャー企業と共同で、内臓脂肪細胞についての研究を行うほか、学内でもバイオマーカー研究センターと共同で、老化のバイオマーカーに関する研究を進め、工学部との医工連携もさらに進めます。

抗加齢医学の拠点を作るべく様々な大学にアプローチしていた時、最もその意義と可能性を考えてくれたのが同志社大学。学問を大切に京都の町の雰囲気にもひかれ、医学部がないことも障害とはなりません。このセンターを軌道に乗せることはもちろん、医系学部の新設も検討されていますし、簡単なことではないと思いますが、新島襄が望んだ医学部の創設も視野に入れ、私がお手伝いできる限りのことはやっていきたいと考えています。（談）

## 「第5回 日経STOCKリーグ」 高等学校1年生チームが最優秀賞受賞

同志社高等学校教諭  
饗庭 一慶  
チームメンバ―  
捨井旭、樋口靖展、三谷晴彦

全参加1917チーム、  
中学から大学まで7577名の頂点に

「日経ストックリーグ」は、中学生から大学生までを対象に2000年より毎年開催されている株式学習コンテストです。3～5人からなるチームに各1人の指導教員がつき、自分たちで選定した投資テーマに沿って仮想株式投資権500万円を投資する「自主テーマによるポートフォリオ学習」と、そのレポートの内容を競うものです。経済パフォーマンスだけでなく、レポートの内容によって、経済や株式投資への理解、ポートフォリオの独創性、専門性などが総合的に評価されます。

本年2月に結果が発表された第5回で、本学1年生（当時）の捨井旭君、樋口靖展君、三谷晴彦君の3名が、全参加1917チーム、7577人の頂点に立つ最優秀賞および金融担当大臣賞を受賞しました。

生徒の行動力と新しい視点に高い評価

同志社中学校では以前から、田島先生の指導の下で「日経STOCKリーグ」に参加しており、連続で部門賞も受賞しています。今回の受賞チーム3人のうち2人も、中学での参加経験があり、もう一度参加したいと、社会科で経済を担当している私のところに指導の依頼にきたのがすべての始まりでした。彼らの動機の純粋性とやる気を強く感じ、引き受けたいわけでした。

まず、彼らは昨年11月に、本校のすぐ側にある国立京都国際会議場で行われた京都議定書のシンポジウムに参加しました。これをきっかけとして、テーマは「地球環境との共生」に決まり、投資先は、環境配慮に特に熱心な、しかも企業の本社訪問が可能な京都府内のハイテク企業を選ぶことになりました。

「環境」というテーマは、他チームも多く取り上げるであろう、いわば激戦区です。彼らはここで「人づくり」「教育」という新しい視点を持ち込みました。「環境に配慮した社屋や社



東京・日経ホールでの表彰式の日の写真  
(左から捨井君、三谷君、饗庭教諭、樋口君。2005年3月12日)

内設備の整備も大切だが、それには莫大なコストがかかり、大企業にしか行えない。環境教育なら中小企業でも可能。地球環境と共生可能な社会構造は「人」が創造し、人は「教育」により創造される」という考え方です。インターネットなどの情報をもとに投資先を選定する際に最重要視したのは、「社内の環境教育がしっかり行われているか」「企業の環境経営の理念がしっかりしているか」。この新しい視点が審査員にも高い評価を受けたようです。

### 会社訪問で環境経営感動体験

投資先12社のうち5社には直接訪問し、環境への取り組みについて情熱をもって解説していただきました。オムロン、京セラ、村田製作所、ニチコン、堀場製作所などそれぞれの分野で世界的企業の本社訪問。彼らも同行した私も、それぞれの社屋や工場の環境への配慮に驚き、徹底した環境教育によって環境経営の理念が社長・会長から海外工場のスタッフ一人一人にまで一貫して通っていることを「体感」。改めて企業の生き残りかけた環境への取り組みの徹底振りに新鮮な感銘を受けるとともに競争の激しさと経営者の先見性と決断力の大きさを知らされました。

年末の企業訪問から約2週間でレポートの提出です。1月始業式後の長時間集中ミーティング、タイトルをめぐって意見の対立などもありましたが、ついに『地球環境との共生schemeの創造』というレポートを完成、締切り時間ぎりぎりに提出することができました。

## 受賞、そして彼らの次の目標は？

最優秀受賞受賞のニュースは本校全体への大きな刺激にもなりました。彼らは自分たちの意思で一步を踏み出し、「やりたいこと」にチャレンジ、結果として高い評価を得ました。同志社の教育理念を思うと関係者として何よりもそのことを嬉しく思います。全体のレベルを上げることが教育の重要なテーマですが、今回のことをきっかけに、一層、生徒の「個」の能力を伸ばすこと、その手助けをすることの大切さを強く感じました。個々の生徒の能力には素晴らしいものがあります。様々な分野で後続く生徒が出てくることを期待しています。

3月には東京で表彰式が行われ、数百人の聴衆を前にプレゼンテーションの機会も与えられました。また副賞としてニューヨーク研修旅行にも招待され、NY証券取引所やグランドゼロ、国連本部の見学、日経アメリカ社長、米国野村証券社長との懇談・昼食会、ソニー・アメリカ訪問と昼食会、コロンビア大学見学、現地高校訪問・交流など、充実した5日間を過ごしました。帰国後は、総長、学長、そして各社社長や会長、商工会議所会頭を表敬訪問させていただきました。

「次に何をするか、どうつなげていくか」が重要だと、彼らは言います。今考えているのは、企業や行政機関、学校の環境への取り組みを高校生の視点でどのように評価し、どのように提言していくか。

「最優秀受賞」を一つの通過点としている彼らを、期待して見守っていきたいと思っています。



アメリカ研修旅行の一コマ（コロンビア大学構内で、左から樋口君、捨井君、三谷君、3月22日）

日経STOCKリーグは、2000年度から開始。実際の経済の動きを体験し、金融の仕組みを自ら学び、考える機会となつている。第1回開始以来の参加者は、2万5千人以上を数える。なお、香里中学校3年生チームが、第5回中学部門の敢闘賞を「ロボットと共同生活はありえるのか！」で受賞している。